

授業・こころ・出会い

中 本 環

小・中・高校で授業を行なってきた。頼まれることもあれば、こちらから研究のためにとやらせてもらうこともある。年間平均5回として150回くらい、ほぼ九州全域になる。

平成7年(1995)1月。牛深中学の1年生相手に詩の授業をした。テキストは、熊本県立黒石原養護学校の第Ⅱ部(筋ジストロフィー)の児童生徒の詩4編であった。

その内の1編に「母ちゃんへ」という西祐士君の詩があった。中学2年生の時に作ったということだった。両親と離れ病棟が住居(下宿)となっている。

母ちゃんへ
小さい時、悪さをすると
しかられた
友達にいじめられた時
一人で泣いた

病棟から電話すると
母ちゃんの声はかすれていた
「仕事はどぎやんね」
「うまくいきよる」
母ちゃんの声

僕と姉ちゃんたちのために
材木置場に出ていく母ちゃん
材木は重たかる
まわりの人とは仲よくしよるとね
僕もなおつたら手伝ってやるけんね

電話からきこえる母ちゃんの声
僕も頑張りよるけん
母ちゃんも、頑張らなりたい
きつと僕も手伝ってやるけんね

4編のうち上の詩が一番好きと答えた生徒の中から、ある女の子に、では読んで下さいと指名した。

立って読み始めた。

場所は講堂で、生徒たちの机のまわりには地区の先

生たちが50人くらい見ている。

読み始めてすぐ、彼女は泣き出した。声を押しこらしても出てくるという感じで泣いている。側に近寄って小声で励まし、泣き止むのを待った。やがて無事きちんとした声で読み終えた。

授業終了後、理由を聞いた。気持ちがわかりすぎるから、というようなことであった。

担当の先生に尋ねたら、成績はまあまあということであったが、要するにこの子は内容をとても理解した、ということなのだ。内容とほんとに出会ったのだ、と言いかえてもよい。

福岡県築上郡の築城(ついき)中学の3年生のクラスで古典の授業をした。平成元年(1989)11月。枕草子の、春はあけぼの。ようよう白くなりゆく山ぎわ少し明りて、紫だちたる雲の細くなびきたる…、夏は夜…。と続く段がテキストである。

39名全員に、自分の好きな季節について200字の文章を書かせた。私の密かな目的は生徒一人ひとりの“枕草子”を書いてもらうことである。

さて、その中の一人の女の子の文章。

夏は、雲ひとつない青空がひろがっている。その空の下で、お気に入りの自転車にのって走っていくと、自分たちの世界が目の前に見えてくる。風になれる。夏は、わたしを変えてくれる。みずみずしさと暑さが入りまじっているその中で、子供たちの笑い声が聞こえてくる。大人たちのはずんだ話し声が聞こえてくる。夏は、今も(私を)変えてくれる。だから、夏は、好きだ。

上の文章を書いた生徒は、いわゆるツツパリのようなスタイルの女の子だった。

全員が、各自自分の文章を読み上げ、聞き合って、この時の授業は終わった。

終わった時、ワァーというどよめきのようなふんい気があった。お互いの内面が見えて、それで互いに顔を見合わせてほほえんでいる、そういう充実した図柄であった。

昭和60年(1985)7月、八代郡泉村の第七小学校で作文の授業をした。児童は全校生7名。3年2名、4年

1名、5年4名の計7名で複々式授業である。1週間泊まり込みだった。

国語の作文の時間だけ私が受け持つ。従って、1日に1回授業すると、あとは、当校の先生の授業を見学する。学校が終わると、担当の先生(平山義嗣。現、竜北西部小)や校長、地元の人と、教員宿舎で酒をまじえて歓談して時間をすごした。何しろ僻地3級の山の中

の学校だから、これが何よりの馳走なのだ。

7人の児童の中に自閉症の男の子が1人いた。この子が卒業するまで5年間平山先生はここに勤めた。以来今も第七小学校の運動会には平山先生とそして私のゼミ生と私と妻と、応援にかけつける。今年は9月27日総勢14名で、児童5名の第七小学校に行く。

(なかもと たまき 教育学部教授 国文学)

永青文庫蔵雑記類より(二)

細川宗孝の死(2)

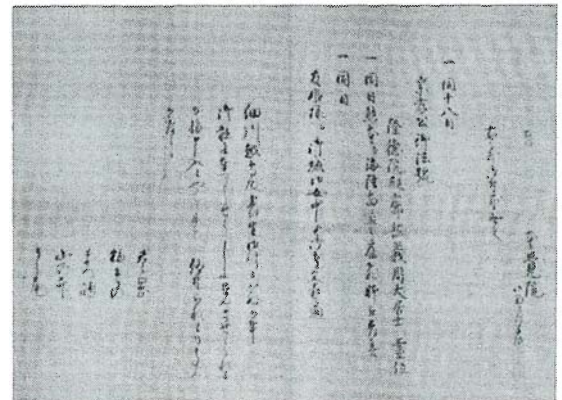
西田耕三

『延享秘録』は、延享4年8月15日から9月22日まで、日をおって宗孝不慮の災難の顛末を記している。日をおってはいるが、直接の記録ではない。事件後、日を経てまとめたものである。ただ、あきらかに細川家側の視点からの記録である。いくつかの項目に分けて摘記しておこう。

〔熊本への連絡〕宗孝の災難は8月15日午前9時頃。その日の午後6時頃に、使番瀬戸角右衛門が早打ちで江戸を立ち、さらに夜になって早打の雇飛脚を差立てている。この雇飛脚は11日後の8月26日午前10時頃熊本へ着く。その夜のうちに目付の生駒十右衛門が熊本を立ち、9月14日江戸着。また、8月27日に熊本を立った用人奥村安左衛門は9月17日に江戸へ着く。往復に1ヶ月を要している。宗孝は8月16日午前4時すぎになくなる。その知らせのために、翌17日、鉄砲頭村井源兵衛が早打ちで立つ。さらに18日に雇飛脚を差立てる。逝去の知らせを受けた熊本から、使番天野善左兵衛が29日に立って、9月21日に江戸着。なお、熊本では9月20日、21日に、宗孝の35日の法事を行なっている。

〔跡式〕宗孝遭難直後に、將軍家から跡式のことは心配なきようにという確認は得ていたが、宗孝死後、重臣たちは心配し、方々に確認を求めている。宗孝の養子となっていた弟の主馬(後の細川重賢)が、支障なく宗孝の跡をつぎ、8月20日から「殿様」と呼ばれる(このことは江戸藩邸の「日記」にもみえる)。

〔友姫〕宗孝の妻友姫へ、8月18日と19日、お城女中および西丸女中たちからそれぞれの主人の気持を伝えるおくやみの手紙が来る。「越中守殿御事、養生御叶なく御死去のよし御聴に達し、御せうしに思召させられ



『延享秘録』、延享4年8月18日の条

候。友姫様御障りも御座なく候やと、御尋あそばされ候御事御座候、かしく」(西丸女中)というもの。友姫は、8月23日から静證院と呼ばれることになる。静證院は紀伊大納言の娘で、重賢と同年。重賢は兄嫁で養母であった静證院に終生孝養をつくす。

〔修理の処罰〕板倉修理の処罰は、宗孝死去の日の夜に行なわれることになっていたが、細川家からの宗孝死去の報告が遅れたこと、ちょうど京都から公家が参向していたこともあって延び、さらに21日は將軍家の差支えのある日に当たり、22日に行なわれることになった。しかし、その日になっても何の沙汰もないので問い合わせたところ、江戸城奥向きの能舞台の新築に伴う能興行のために延引、ということがわかる。これらの情報を細川家に提供したのは、若年寄本多伊予守の奥医師で、細川家へも心安く出入していた武田叔安老である。細川家の重臣たちが、一日も早く修理を処罰してもらい、藩士の不満を静めようとしていることが、これらの記述から伺われる。修理の切腹は23日。

〔お城坊主〕事件直後から、お城坊主の詮議が行なわ